

西藏文献の史料的价值(下)

——吐蕃王統論を中心として——

佐藤 長

三

次に王統と年代について支那史料と第十章とを比較し、その一致と乖離の諸原因を探索して行きたいと思ふ。

一、支那史料

(一)永徽元年(庚戌)……棄宗弄讚死し孫立つ 新舊唐書吐蕃傳上(以下新舊傳上下と略)冊府元龜外臣部九六六・九七四(以下冊府と略)

(二)儀鳳四年(己卯)……贊普卒し其の子器弩悉弄嗣ぐ 新舊唐書吐蕃傳上

(三)調露元年己卯)……同右 資治通鑑元年二月壬戌の條

(四)長安三年(癸卯)……器弩悉弄卒し棄隸臨贊立つ 通鑑三年末條

神龍元年(乙巳)……同左 冊府九 吐蕃の使者來りて喪を告ぐ。中宗之が爲に舉哀廢朝一日す 舊傳上

吐蕃大首領贊普卒し帝之が爲に舉哀廢朝一日す 冊府九

(四)天寶十四載(乙未)……乞黎蘇籠獵贊死し婆悉籠獵贊立つ 舊傳上・通鑑同年末の條

乞黎蘇籠獵贊死し子婆 新傳上

悉籠獵贊立つ 冊府九六六・新傳上

(五)大曆十四年(己未)……韋倫が使して面謁した贊普は 新舊傳下

建中元年(庚申)……乞立贊であつた 新舊傳下

(六)貞元十三年(丁丑)……贊普死し其子足之煎立つ 通鑑十三年夏

四月の條 婆悉籠獵贊卒し長子立つ。一才にして 冊府九

卒す 六六 贊普十三年四月を以て卒す。長子 舊傳下

立ち一歳にして卒す。次子嗣いで立つ 貞元二

十年の條

(七)貞元二十年(甲申)……贊普死す新舊傳下・冊府九六六 贊普死し其の弟立つ通鑑二十年春正月の條

(八)元和十二年(丁酉)……贊普卒するを以て來告す舊傳下・冊府九六六・九七六・九七九 贊普死し可黎可足立つ新傳下

(九)開成三年(戊午)……彝泰贊普死し弟達磨立つ通鑑三年の條

(年月不明)……贊普死し弟達磨立つ新舊傳下

(十)會昌二年(壬戌)……(達磨) 贊普卒す新舊傳下・冊府九六六・九八〇

ニ、テプテルゴンボ テキストには年代は皆西藏式の干支のみが記されてあるが便宜上支那の干支と年號とを掲出した。

(一)永徽元年(庚戌)……ソントエンガンボ strong btsan

sgam po 死し子グンソングンツン gun

strong gung btsan 早逝せるによりマンソニン

ツン mang strong mang btsan 立つ

(二)儀鳳四年(乙卯)……マンソン死しドンマンボルジェ

adus strong mang po rie 立つ。

(三)神龍元年(乙巳)……ドンソ死しチデツクテン khri ide

btsug brtan 立つ。

(四)天寶十四載(乙未)……チデツクテン死しチソンデツテ

ン khri strong ide btsan 立つ。

(五)建中元年(庚申)……チソンデツエン死しムネツエンボ mu ne btsan po 立つ。

(六)貞元十三年(丁丑)……ムネツエンボ死しヅツエツエン po tsu tse btsan po 立つ。

(七)貞元二十年(甲申)……ヅツエツエンボ死しチデソントン khri ide strong btsan 立つ。

(八)元和九年(甲午)……チデソントン死しカリカチュ kha li kha chu 立つ。

(九)開成元年(丙辰)……カリカチュ死し末弟タム tha mu 立つ。

開成四年(己未)……ランダルマ glang dar ma 王立ちて第四年目なり。

以下兩者の記録を便宜上支那史料を中心として検討して行かう。

(一)西藏史上有名なソントエンガンボが支那記録の棄宗弄讃である事は言ふまでもない。しかし此の兩者の名稱は全く一致しない。プトン佛教史にはチデソントン khri ide strong btsan なる王名を出し、

(彼は)その時西藏の人民の王を無視する言を聞きて、十

徳の戒法を採り、西藏の人民を佛法に歸せしめられたば、名をソントエンガンボと稱せらる。²⁴

とある。ソントエンガンボと云ふ名稱の説明は西藏では後の記録には大體此の解釋を踏襲して居り、²⁵それがいはゞ稱號であつて本來の名でない事は明かである。それにしてもプトンの云ふチデソントエンでは棄宗弄讚に一致せず、解決を別の史料に求めねばならないが、茲にかの有名な唐蕃會盟碑を參照しよう。

第一代支那君主李の王位に即きて後大唐の國二十三年過ぎゆき(し時)、一つの王統のもとにせん爲化現せる神贊普チソントエン khri strong brtsan と支那君主太宗文武神皇帝二者は國家を一(の如く)なさん事を語らひて貞觀の年に文成公主を贊普の宮居に迎へたり(E. I. 21—25)

之によりて棄宗弄讚 k'i-sung-lung-tsan が khri sron brtsan である事は決定的であつて、別名「棄蘇農」k'i-suo-nung 新傳 も khri strong の音譯に相違ない。かくして兩史料の矛盾の一つは先づ唐蕃會盟碑によつて解決せられた。

(二) 器弩悉弄 k'i*-tho-siet-lung はドンと比較して khri adus strong である事ラウファアの比定せる如くである。²⁶マン

ボルジエ亦支那史料に人名として屢々現れる「莽布支」である。テプゴンの彼の父王及び祖父のマンソンマンツェン、ダソソングンツェン共にプトンに一致する。

(三) 器弩悉弄の逝去と棄隸蹄贊の即位は通鑑のみ長安三年にかけるが、その他の史料の神龍元年は告哀使が唐朝に到着した事にかけて述べてあるのであるから或は通鑑の記事を正しとするべきかも知れぬ。

棄隸蹄贊 k'i-liei-taik-tsan はテプゴン及びプトン共にチデツクテン khri ide btag brtan であるが最後の音が一致しない。ロツクヒルは漢字名よりして khri ide gtsug btsan と還元したが、²⁷ラウファアは ide が獵 ide で表される事はあつても隸で表される事はなく棄隸で khri を示すものであるとし、棄隸蹄贊即ち khri gtsug btsan と見た。²⁸しかし思ふに隸は現代音は ti であつても唐代には恐らく liei であつたであらうからラウファアの批判は當らない。再び唐蕃會盟碑を見よう。前掲引用文に續き、

後化現せる神贊普チデツクツェン khri ide gtsug brtsan と支那君主三郎開元聖文神武皇帝二者は國家を一(の如く)になす事を語らひて、姻戚關係を重ねて、景龍の年に金

城公主を贊普の宮居に迎へ甥舅となりて歡喜せり (B. I. 29—29)

とある。金城公主の降嫁は中宗時代景龍三年十一月に行はれたもので、玄宗とは関係はないが翌唐隆（景雲）元年には宮中に變があつて睿宗が後を嗣ぎ、しかも其の變の總指揮者は玄宗であつたから、誤つて斯く記したのかも知れぬ。事實開元天寶時代を通じて金城公主と玄宗との間には親しい文通の往復が行はれて居た。²⁹⁾ この史料により棄隸踏贊は *khri lde gtsang brtsan* である事誤ない。唐蕃會盟碑によつて決定される事實の第二である。

(四) 乞黎蘇籠獵贊は明かに西藏史料に屢々出て来るチソンデツエン *khri strong lde btsan* であるが最後の「贊」は會盟碑の他の例より見て *brtsan* とするのを可とする。所で天寶十四載にチソンデツエンが卒しサソンデツエンが後を嗣いだと云ふ支那史料と、チデツクテンが死しチソンデツエンが次いで立つたと云ふテプゴンの記事とは完全に矛盾する。支那史料によればチデツクツエン棄隸踏贊とチソンデツエン乞黎蘇籠獵贊との關係は明かでなく、又チソンデツエンとサソンデツエン姿悉籠獵贊とは繼いで立つただけで親族關係は何等

示されて居ない。又此の後に嗣いだと思はれる王の乞立贊との關係も明瞭でない。その點テプゴンはこの繼承の關係に於て何等の矛盾をも藏さないが如く見え、一見之に従ふのを可とするが如く思はれる。しかし此處での兩史料の不一致は全く別な一史料から解釋されるであらう。

今日唐蕃會盟碑と並ぶ重要な石碑がラサのポタラ宮殿の前に建てられて居る。ワツデルがポタラ碑 *Potala Pillar* として初めてその鈔寫 *eye-copy* を紹介し譯註を發表したが、後ベルが更に正確なコッピイを作り、その翻譯のみを紹介したものである。³⁰⁾ 内容はチソンデツエン *khri strong lde b(r)tsan* の時に支那に侵入し京師を占領した事を記すもので、正に安祿山の亂に乗じて代宗廣德元年に吐蕃が長安を占領した事實に一致する。所でこの碑にはチソンデツエンを「御子チソンデツエン」 *btsan po sras khri strong lde btsan* と稱し (B. I. 11) 其の前代を「父王チデツクツエン」 *btsan po yab khri lde gtsang tsan* と稱して (B. I. 8) 居る。従つて此等兩者は親子關係であり、贊普の位について直接繼承が行はれたのであり、支那侵入は確實に前者の在位中と見做して差支へない。テプゴンが此の兩者の間に直接繼承を認め、チソンデ

ツエンの在位を天寶十四載から建中元年にかけて廣德前後を含めて居るのは全く正しいものと見做さなければならぬ。

テブンはブトン其他の西藏古傳承により斯く決定したのであらうが、これは廣德前後の事件が抵觸することなく容れられると云ふ事ではあつても天寶十四載にチソンデツエンが即位したと云ふ證明にはならないと思はれるかも知れぬ。この事についてはやはり支那史料を再度検討する必要がある。

天寶十四載贊善乞黎蘇籠獵贊死、大臣立其子婆悉籠獵贊爲主、復爲贊普、玄宗遣京兆少尹崔光遠兼御史中丞、持節費國信冊命、弔祭之、及還而安祿山已竊據洛陽

舊傳上・新傳亦之に殆ど同

じくベソンデツエンが「遣使者修好」した爲玄宗は崔を遣はしたとある

之によつて見るに當時贊普の交代があり、玄宗が崔光遠を遣はした事は事實であり、しかも還ると直に安祿山の亂が起つた事を考へると、茲に混亂の爲チソンデツエンの即位を逝世と誤つたのではないかと思はれる。それにしてもサソンデツエンの在位の有無については現在如何とも決定し難い。

(五)天寶十四載より建中元年までは安史の亂とそれによる塞外諸民族との葛藤により贊普の交代の通知はなかつたらしい。此處に韋倫が大曆十四年から翌建中元年にかけて西藏に

使した時面接したのは乞立贊なる贊普であつた。これの比定を決する前に先づ逆に其の後の贊普の系統を明瞭にしておかなければならぬ。

(A)此の時立つた贊普は可黎可足 *ka-lii-ka-tsinok* (*ko-li-ke-tsu*) であるが明かに唐蕃會盟碑の *khri gtsug lde-bri-san* (E.I. 1. 1. 15) の *khri gtsug* を寫したものである。先に陳寅恪氏は此の事を注意し、通鑑の所謂彝泰贊普は即ち之なりとして居るが、既にラウファアも「西藏王統鏡」*regal rabs gsal bai me long* の *kkri gtsug lde btsan rai pa can* を引いて來て *khri gtsug* は *krik-tsuk* と發音された爲に可黎可足と寫されたのであらうと鋭い觀察を下して居る。しかしラウファアは此の碑文のE面は見えて居ないのであり、W面もワツデル・バッシェル・羅振玉等の不十分なコッピイだけを見て居るに止まつて居る。そのW面に於てはこの王名は磨滅の爲後半しか見る事を得ないのであるから、ラウファアは一方に於て可黎可足は西藏王チデソンツエン *khri lde srung btsan* に一致すると言ひ、その兩名の音韻の不一致に對しては何等説明を試みて居ないのである。ラウファアはチデソンツエンなる西藏王名を西藏文獻から得たに相違ないが出所を

明示して居ないので困惑せしめられる。

所で通鑑には、

元和十一年二月、西川奏、吐蕃贊普卒、可黎可足立。

とあり、新舊唐書吐蕃傳の記載等より少くとも一年早くチツクデツエンが即位した事を云つて居るが、この矛盾も唐蕃會盟碑の長慶會盟に關する次の記事によつて解決されるであらう。

化現せる神贊善チツクデツエンの仰せにより……略……支那君主文武孝德皇帝と、甥舅二者たる事につきて、化現者の思ひは一致せり。……の國家は一なり。西藏支那二國は中外の地を守る事につきての大和會をなし、支那國に於ては京師の西方シヤクサンシ *qag sang si* のほとりにて、大西藏の年號は彝泰 *skye dtag* 七年、大支那の年號は長慶初年辛丑の年の冬の初月十日に、壇場を設けて支那によりて同盟は認承せられたり。西藏國にてはラサの宮殿の東方ラトエ國 *sbra stod shai* にて大西藏の年號は彝泰八年、大支那の年號は長慶二年壬寅の年の夏の月中六日に、壇場を設けて西藏國によりて認承せられたり。同盟の要領を碑に記せるは是即ち大西藏の年號は彝泰九年、大支那の年號は

長慶三年癸卯の年の……中月十四日に碑に文字を記したり (B.I. 51-67)。

此處に西藏の年號と支那の年號とが三個所對比されて居るが、逆算して見て彝泰元年は元和十年に相當り、チツクデツエンの即位は正にこの元和十年になるのである。西川節度使は翌十一年二月に之を奏したのであり、舊傳・冊府が共に十二年にかけてあるのはその來告の時期であり、新傳はそれを匆卒にとつて贊普の交代の年月になしたのであらう。

テブゴンにはこの王をカリカチュとして居るが、恐らく支那史料の直譯に相違なく、之がチツクデツエンレーパチェンであることは判斷出來なかつたらしい。テブゴンの第七章における王統にもレーパチェン *ral pa chen* の名はあるがチツクデツエンもカリカチュもない。テブゴンの文獻としての不統一な點をそのまゝ表して居る一例である。

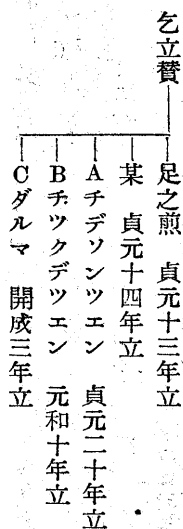
(七)所でチツクデツエンの前代の王は貞元二十年に立つた贊普であるが、漢文史料には王名がなく、テブゴン、プトンは共にチデソンツエン *khri lde srong btsan* なりとして居る。唐蕃會盟碑には貞元の會盟が画された事を述べたと思はれる所に、

贊普父王神の化現チデソンツェン *bsan po yab lha aphyur l*
khri lde strong brsan の仰せにより、ガムキエチンボ *sgan*
dkyel chen po は教政いづれにも熟達し明けき慈愛深き恩
 恵もて外内の區別なく八方を掩ふ云々。(E.I. 34-36)

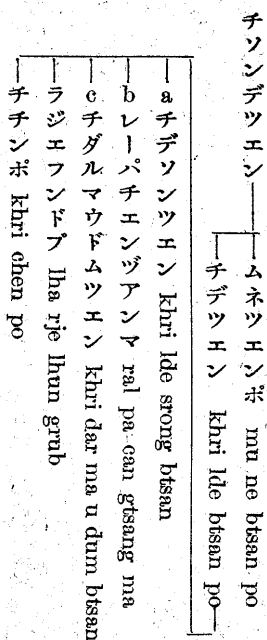
とある。ガムキエチンボは當時吐蕃王廷における一大勢力家であつたらしく、スタイン文書の中にも尙綺心兒 *shang khri sun rje* 等の名と共に散見する。^{③④} 尙綺心兒は長慶會盟にも吐蕃の最高幹部として出席して居るから従つて少くともチツクデツェンの時代に直接してチデソンツェンの在位があつたと見て誤りあるまい。唯茲でチデソンツェンを父王 *bsan po yab* とするのは如何にも直接の父なる如く感じさせるかも知れないが之は寧ろ精神的な意味に取るべきであらう。*rgyal po yab* が「國家の父なる王」*rgyal po yab yum* が「國家の父母なる王及びその後」の意なる事が参照になる。尤も *bsan po yab* についてはチデツクツェン(四参照)の例もあるがチツクデツェンには *bsan po sras* なる語が修飾せられて居ないので注意すべきである。プトン等の記載の如くチデソンツェンとチツクデツェンは兄弟關係と見做すのは何等差支へないと思う。支那史料にもこの兩者について親子

關係を示した字句を一つも用ひて居ないのは消極的ながら證據となるであらう。

(a) さて以上の如く定めて來ると支那史料によつて次の如き系圖が構成される。



テブゴンには此の邊の系統には親屬關係が何等明示してない故に、より原初的な史料を含むと考へられるプトンを参照すると、「チデツェンに五子あり」と云ひ、整理してみると次の如き系譜が與へられる。



右の中 A || a, B || b, C || c なる事は疑ない。従つて乞

立贊をチデツエン khri lde b(=)gan と見做すの可なりと信ずる。³⁶⁾但足立煎と某の二王はラジェフンドブとチチンポに當るかどうかは決定し難い。プトンにはチデソンツエンの前代がチデツエンになつて居るが直には信用出来ない。又テブゴンには同じくチデソンツエンの前にツツエツエンポ dan tse btsan po をおいて居るが恐らく「足之煎」tsiwok-ts'i-sien. (北京音 tsu-tsi-sien) — gtsug khri chen (?) — を漫然と音譯使用したものと思ふ。第七章の王統にはこの王名は完全に抹殺されて居る。

尙ムネツエンポに當るべき王は支那史料には全くない。プトンは之をチデツエンの兄として居るが「一年七ヶ月治め、十七才を以て御母に毒を進められ崩ぜられたり」³⁷⁾と云つて居る。従つてこのムネツエンポを足立煎に當てる事も一應考へられるが、それによつて配當される支那史料と西藏史料の音韻其の他の不一致はより廣範圍に渉るであらう。又プトンに示された系統に従ふとチソンデツエンとチデツエンの間にムネツエンポがあるからムネツエンポは漢文史料の婆悉籠獵贊ではないかとの疑もある。尤も之もかく一應定めれば世代數の點に於て兩史料の差を無くし得るかも知れないが王名音韻

の不一致年代の未決定等は解決し得ない問題として残る。要するにこの所の王統は決定し難く、西藏王統論に於ける最大の難關をなして居る。以上は一個のより妥當と思はれる試論を掲出したに過ぎない。

(九) チツクデツエンの彝泰贊普なる稱號は通鑑のみの使用せるもので唐蕃會盟碑に會盟當時の吐蕃の年號として skyid tag が用ひられ、之が漢譯では彝泰となる事は疑ない。新舊唐書吐蕃傳にはこの贊普が「幾三十年」在位した事を云つて居るが逝去の年月を記して居ないので計算する事は出来ない。通鑑のみが開成三年と明示して居るので元和十年より計算すれば二十三年間の在位と云ふ事になるであらう。

嗣いで立つた達磨王はテブゴンにはランダルマ glang dar ma と云つて居るが正しい稱號ではないと思ふ。プトンには前掲の系圖チダルマウドムウエン khri dar ma u dum btsan とあり、第七章の王統にもチウムツエンダルマ khri um btsan dar ma とある。glang (丑) と云ふのは「丑の如き暴虐者」と云ふ意味の惡稱であるから本來の名稱とは取れない筈である。

所でテブゴンには

丙辰の年(譯者註 開成三年)にカリカチュの後を嗣ぎて末弟タム立
ちたり、^{③⑧}

と云ひ、ついで若干の記述の後に、

己未の年(譯者註 開成四年)はランダルマ政治を取りて第四年目の
己未なり。^{③⑨}

と云つて一致しない記事を出して居る。タムは恐らく達磨
dā-mūa (北京音 ta-mo) の音譯であらうがテプゴンの作者
はそれが dar ma と一致する事を理解し得なかつたのであろ
う。斯くタムとダルマとが同一人であるとすればダルマはや
はり開成元年に即位した事になる。しかし開成元年の即位と
するならばチツタデツエンの在位は二十一年となつて「幾三
十年」の句により合はない事となる。恐らくテプゴンのよつ
た史料が支那史料の三年を元年と見誤つて記載をなしたもの
と考へられる後述。
参照。

四

右の對照を通じて我々は西藏の王統に關して次の表を得る
であらう。

永徽元年 (庚戌) 六五〇……チソンツェン khri strong

brtsan (棄宗弄贊) 死し孫マンソンマンツェン
mang strong mang btsan 立つ。

調露元年 (己卯) 六七九……マンソンマンツェン死しチド
ンソン khri adus strong (器弩悉弄) 立つ。

長安三年 (癸卯) 七〇三……チドエソン死しチデツクツエ
ン khri lde gsum brtsan (棄隸跢贊) 立つ。

天寶十四載 (乙未) 七五五……チデツクツェン死しチソン
デツェン khri strong lde btsan (乞黎蘇籠獵贊) 立つ

大曆十四年 (己未) 七七九……チデツェン khri lde

建中元年 (庚申) 七八〇……b(ri)tsan (乞立贊) 在位

貞元十三年 (丁丑) 七九七……チデツェン死し其の子足之

煎立つ。

貞元十四年 (戊寅) 七九八……足之煎死し其の弟某立つ。

貞元二十年 (甲申) 八〇四……某死し其の弟チデソンツェ

ン khri lde strong brtsan 立つ。

元和十年 (乙未) 八一五……チデソンツェン死しチツクデ

ツェン khri gsum lde brtsan (可黎可足) 立つ

開成三年 (戊午) 八三八……チツクデツェン死しダルマ

dar ma (達磨) 立つ。

會昌二年（壬戌）八四三……ダルマ死し國中混亂す。

さて以上の對照考察を通じて人は兩史料の間に案外背致するものが少く特に年代についてはかなり西藏史料も正確であるとの印象を受けるかも知れぬ。しかし兩者の一致は實は當然なので、テブゴンのこの年代を記した第十章には冒頭に次の句があるのである。

ソソツエンよりダルマまでは支那の記録等に述べられたるものをラマリンチンダクパが西藏語に翻譯しクンガードルデニ王が文字に記したものでによりて書き記すなり。^④

右の文によりテブゴンの年代の正確さと云ふのは實は系統的には全く支那史料より出たもので、年代に關する限り何等西藏の原史料から出發したものではない事が明かになつた。二三の年代について支那史料が誤つて居るにもかゝらず、西藏史料がその誤と同一の年代を取つて居るのも當然であり、支那史料から逆に無批判に取り入れたと思はれる奇怪な王名があるのも無理はない。古代史の年代計算を基礎とするものであるならばそれはそのみで意味を持つて居るかも知れない。しかし古代史料としてのテブゴンの價值は之を以て著しく劣る事になる。少くとも年代計算が正確であるからと云ふ

理由で古代史料として評價する事は不可能となる。然らば第七章の王統は如何と云ふ事になるが、天王七代、中王二代、地王六代、デ王七代より更に九代を経てソソツエンガンボに至る王統は一見頗る整然たるものである。所がその中、コンテンポラリイと考へられる支那史料、會盟碑、スタイン文書等と完全に一致する王名等はない。ソソツエン以後の王統にせよ、既に述べた同一書内の記述とも一致せず、さればと云つてプトンと比較してもプトンの方が史料的にはよりウルな感じを與へる。結局テブゴンに於て年代の正確さ、内容の豊富さにその價值を認めようとなれば、それは後期弘通以後の部分であつて、前期弘通即ち古典古代の部分にあるのではない事になる。茲で或は人はスンバケンボの學識を謳ひパクサムジョンサンを提出するかも知れない。しかしパクサムは王統年代に關してはプトン・テブゴンを無批判に受容して、より事實に遠い歴史を構成して居る。しかも何等有益な傳承なり事實なりを示す事もない。

茲に至つて古代西藏史研究に關する方法は明かであらう。即ち支那史料と會盟碑、敦煌文書等の間で事實決定を行ひ、西藏史料はそれを基準として整理されるべきである。結局西

藏史料は史料としての價値の位置は低く、支那史料がより原初的な根本史料とされなければならない。

この結論は西藏史料が一見頗る無價値なものと決定されるが如く取られるかも知れぬ。しかし一方支那史料の記述と云ふものにも大きな限界のある事は塞外史一般の常識である。

例へば西藏佛教の問題にせよ唐代支那文獻にある記述は寥々たるもので到底その現實を具體的には知る事は出来ない。敦煌文書出でてより、より詳細に寺院とか僧侶とかの存在を知る事は得たが、尙之は斷片的なものであつて、系統的な材料とする事は不可能である。我々は此の點やはり西藏史料を活用せざるを得ないのである。プトンにおける年代の不明確さをも佛教流傳の事實までも否定することは出来ない筈である。

我々にはやはり複雑ではあるが諸史料との對比を慎重に行ひながら西藏史料を巧に利用せないわけにはゆかない。そしてそれによつてのみ古代西藏の文化の方面は、より詳細に、より明確に把握する事が出来るのではないかと思はれるのである。

〔完〕

〔註〕

②④ dei tshé bod abangs kyiis rgyal po la gce ba gsan nas dge ba bcu'i khriims bcas te bod rnamis chos la bkod pas ming strong bisan gsum por grags so/

⑤ 青木先生は云ふ。「ソニンツェンガンボとは『直進・嚴正・深慮者』の義で、直進とは正直にして勇氣ある事、嚴正とは仁義、深慮とは睿智あるの謂なれば必竟智仁勇兼備の明君たる事を示した語である(『西藏文化の新研究』一二〇頁)。尙シトウケンボ st' tu mkhan po の「三十偈性入法註釋」 byakramanmūla sum cu pa dang rtags kyi gjug pa shes bya ba にはソニンツェン王について次の如く述べて居るが、西藏の學者に考へられて居る代表的觀念と見てよいであらう。このテキストはダヌ編纂の活字本もあるが、(S. Ch. Das, An Introduction to the Grammar of the Tibetan Language with the Texts of Stui Sum-rtags, Dag-je Sal-wai Me long and Stui Shal-lung)。青木先生所藏のラサ版の一種によつた。

大王即ち人の神にてもあり、荒ぶる人々従はしめ難き者共を二種(譯者註、法と世間法)の埒きならはしの道に「直く進ましめ」 strong 親しきもの、親しからざるもの又はその半ばなるもの等に等しく平靜なる慈みの心を與ふる爲に、難しき勅命を「強き力もて」 strong po 諸々の臣下を支配する事を多くなし、内外道の行の所依一切を混同し紛亂する事なく、三種の觀察もて辨別し、博識なりと稱へられる者によりても思慮の深き量り知れず、故に「深きもの」 gsum po 即ちソニンツェンガンボ strong bisan gsum po なる佳き聞えの名をもて讃へらるゝもの、衆生の吉祥として現れ出でたり (3b)

rgyal po chen po mi lhaen yang na skye bo mi srin pa
gdul dka ba rnam lngs gnyis kyi srol bzang poi lan du
nan gwis strong shing/ mdsa ba dang mi mds ba dang
bar na rnam la thugs rab tu anyoms pas phyogs sun
lhung bai phyr qin tu drang bai bka khrius bisan poi
gnas las mna og ba rnam ada bai skabs mang ba dang/
phyi dang nang gi bya bai gnas thams cad na achol shing
akhrugs pa med par dpyad pa gsun gwis gtan la abebs
qing mdangs par grags pa rnam kwis kyang dgongs pai
gting dpog pa med pai phyr sgan po ste strong btan sgan
po shes mshan anyan par grags pa nyid skye dgui dpal
du gar to/

- ②⑧ Laufer, Bird Deviation among the Tibetans. T'oung Pao.
1914. p. 29.
- ②⑨ Rockhill, The Life of Buddha. 1884. p. 217.
- ③① Laufer, ibid.
- ③② 「賜金城公主書」(今唐文卷四〇)「謝恩賜錦帛器物表」「乞許贊
普請和表」「請置府表」(同卷一〇〇)
- ③③ Waddell, Ancient historical Edicts at Lhasa. JRAS. 1910.
p. 1248. Charles Bell, Tibet past and present. Appendix II.
(田中一田譯「西藏過去と現在」附錄11)
- ③④ 田中氏譯には「京畿」を「居」の音に誤り、*kei gi*
と見做す。唐蕃會盟碑には *kei ge* と出づる。(E. 1. 57)
- ③⑤ 陳寅恪「吐蕃彝泰贊普名號年代考」(蒙古源流研究之1)國立中央
研究院歷史語言研究所集刊第二本。

尙陳氏は(五頁)北平圖書館所藏敦煌本八波羅夷經には
その當日の吐蕃の贊普の詔書を附載し、中に

令諸州坐禪人爲當今神聖贊普乞里提足贊聖壽延長祈禱。

とあるが、陳氏は此の贊普名に「乞里提足」二字當は傳寫誤
と見て、之を khri gtsug lde brsan 即可黎可足彝泰贊普の
音譯名と見て居るが、王の長壽祈禱をなすに其王の名を誤る等
は、事は常識として餘り考へられぬ。此はその khri lde
gtsug brsan 即可黎可足と見て差支へないとはなからぬ。

- ③⑥ Laufer, Bird Deviation. TP. 1914. p. 91.
- ③⑦ Thomas, Tibetan Documents concerning Chinese Turkestan.
II. JRAS. 1928. p. 81.

③⑧ 唐蕃會盟碑 N. 1. 4.

③⑨ *hiap* を *ide* に當ることは一見音韻的には無理なやう
であるが藏 *liei*・藏 *hiap*・藏 *lap* 等の *ide* が當りなう居る
(田中參照)のと同く見做し得るであらう。勿論 *hiap* の *-p* は
b(r)stan の *-s* を表したものである。

- ③⑩ [mu ne btan po] chab srid lo goig dang zla ba bdun mdsad
de bou bdun pa la yun gwis dug btang ste adas so/
③⑪ me pho abrug la bod kyi rgyal po adas/ lo de nyid [1] 等
[5] chung bo tha chungs tha mu shes ba rgyal sar bskos/
③⑫ sa mo lug adi glang dar mas rgyal srid byas nas lo bshi
lon pai sa mo lug de yin no/
③⑬ strong btan nas dar mai bar du rgyai yig tshang la sogs
par btat pa bla ma rin chen grags pas bod skad du bsgyur
te byung ba/ mii bdag po kun dga rdo rjes yi ger btat pa
bshin bri bar bya ste/

AN EXAMINATION OF TIBETAN WRITINGS AS HISTORICAL SOURCES

By Hisashi Sato

Bu-ston's Chos-hbyun (History of Buddhism), Deb-gter snon-po, the fifth Dalai Lama's Chos-hbyun Dpag bsam ljon-bzan, and Tāranātha's Chos-hbyun and Horchos-hbyun are usually regarded as the most important historical date of the ancient Tibetan dynasties, which were called T'u-fan by the Chinese. However, except the first two they are of little value as historical materials, because they are nothing but compilations of older documents. Bu-ston's Chos-hbyun and Deb-gter snon-po are very important records. From the standpoint of the history of Buddhism Bu-ston's writings are extremely valuable, and among his works the Ded-snon is considered to contain accurate chronological data. Of what nature is the Deb-snon's chronology? To what extent are the data contained in it reliable?

The first volume of the Deb-snon consists of eleven chapters. Chapters II-V are compilations of the traditions taken out of the Hindu sūtras, while Chapter VI is a compilation of the Tibetan traditions. Historical events are described only in Chapters VII, VIII and X, but they are noting but an uncritical collection of some Chinese and Tibetan materials. After close examination it comes out that the chronology of the Deb-snon is reliable only so far as it depends on the Chinese materials.

With regard to the chronology of the Tibetan dynasties there are discrepancies between the Chinese records and the Tibetan documents.

In the light of the author's research the contemporaneous Chinese records, the Lhasa Treaty Edict Inscription and the Tun-huang documents are to be taken as the most reliable source materials, while the Tibetan documents are much inferior because of its nature as mere compilations of the traditions.